

著者は、イエスが十字架の上に死なれた後、復活して、弟子たちに現れるようになり、そしてイエスは父のもとに帰ると理解しています。しかし、著者はイエスの生前に 16 節のイエスの言葉を聞いた弟子たちはそれが十字架の死と復活を指していることは理解できなかったと記しています。弟子たちは最後まで、キリストとしての働きと栄光が現れることを期待しており、イエスの言葉に困惑し、互いに議論しているのです。著者は「しばらくすると」を復活までの時間が短いことを指すと理解し、またイエスの再会の約束を来臨ではなく復活させられたイエスが現れることと理解しました。イエスの受難・十字架という出来事に出会った時、弟子たちは泣いて悲嘆に暮れる経験をしました。一方、弟子たちの悲しみは敵対する世にとっては喜びである、と記しています。

この福音書が書かれた時代、イエスを信じる人と信じない人、特にユダヤ教徒との対立は決定的になっていました。イエスを信じる人たちは会堂から追放されたのです。この福音書では「イエスを信じる人たち」と「信じない世」を対立させる傾向が見られます。著者は 20 節の後半で弟子たちの嘆き悲しみは、すぐに喜びに変わることが約束されているとし、この転換を女性が子どもを産む時の体験を比喻として印象深く記します。「産みの苦しみ」は新約聖書の他の文書ではイエスの復活と来臨の間の出来事としていますが、著者はイエスの十字架の死と復活させられたイエスに出会う間の弟子たちの内的な、心の出来事として記しています。そして、十字架直後の状況を陣痛の後に出産の喜びを体験する妊婦のように記しているのです。

イエスが十字架にかけられた時、弟子たちはみなイエスを捨てて逃げ、不安と恐れの中に置かれました。ところが、それから三日目の朝、復活させられたイエスは弟子たちに現れました。「弟子たちは、主を見て喜んだ」と記しています。私たちも苦しいことや悲しいことを経験し、耐え難い状況に陥ることがありますが、そのような私たちにも悲しみが喜びに変わる転換は起こるのです。それは、復活させられたイエスが戻ってきて、イエスを信頼する人たちと共に、またその人たちの内にいるようになる日に起こると記すのです。そして、著者はイエスの名によってなされる総ての祈りは父なる神さまに聞かれる、「願いなさい、そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる」、と記しています。「求めなさい。そうすれば、与えられる」という Q 文書のイエスの言葉が用語を変えて記されています。このイエスの約束を信頼して、イエスを求め、イエスと共に歩んでいこうと思うのです。